

第 27 回 美術教育研究会・オンライン大会

口頭発表・展示発表

要旨集

*発表順に掲載しています。

=i pŮ -°° eŮ ° 7Ůj; N). 6t 01t 6t J/ Ů ó' <n7i äèNü\$J< N
COD<Ů <l ŸFI q? 8I # äè<OD; Ě~<N=OH". uNyJl N04(8<Ě É
; 4t 6i ži vžJGŽ; : 30/

O2=i t 4<BtE€< ž: t BtNü\$ i äè=i x# (J" t" H: t/ 1" H(/i tO
2<² f8ü~N±JOD; i l , J(8#- : 1*€<äèNĚ~*i rN4%I «ž 6t J/ ü\$J
OD< uN4%I i /K# tO2; ~M: %: K>~ ŽGŽ; 4%I «ž 6\$O/² f8ü~N±JOD
; i°@ &i " : uN4%J(88Ůž 6t J/ äè; ü\$JOD< uN9<GŽ; l , J" i ~
i' , J O2<ü\$J u7 ") NøÆ, JOD; =i 9<GŽ; rNü\$J" N žJ(8i /<OD
; owÿ; ' , J(8# 7tJ8 ž 6t J/

ä' ©> 7=i ž á; 30 " . ě ĆNóý* OhkQUdZ`N•Im' J/(<ó' =i
pŮ -° æâ, -Š° ž ó' B i™-Ů° Ě©XiYkŮŮ 88E; M. 6t 01t
OE<7tJ/BOi ó' WYZ_8*6 š<»j Ůµ; ¥ , J°ü# ' NŮž i ó' Nón5
&6%KO(8; í NvžOt/

ž áú¥=i Sg^ 8: l i l . - p¾ÿ 8: 30\ VYf ě Ć<óý7tJ#i áó' =i
Sg^ %œBã; Ž(8#7\$OE<7tJ/ áó' =i pŮ -° | " pō XiYk; GJ¼
ð, Á`gRec8*6 MKO/ó' [kb=ifi((L; <(J-t: N^EŽ`) : W] eZ
`5%I ~fl8 *i " . Nóý*OE<5%I N 30/ yN Žn7i ; tJ-°<Ů Ÿ
< <N" ĚA s* i BOi " . ě ĆNóý, J(87i i*) Ní+i Ě~<N C\$3" &8: J(
8N Ó*Oó' 7tJ/ . =i°è p¼...< , °è; Ž i i žü8*i ó'; zý, J ě Ć
< }ùN Í* i³ j N ~š8*6 30/

| " pō XiYk; =i ó' <Ä©F" Ě <Ě© ů: 9< ÄtTak] Nt 01\$ i ó' N Ž(
8#7\$O/ó' {=i " . ě Ć<tJ™- i ... \VYf - (Ž*4Nzý*O/BOi -°æ <ö
ĆNó" *i y; zý, J ç=i yªĐ8: J i < °7 õ ¶N t : #H çNŮ *i /
< çNzý*6ó' N Ž(88*O/ÄÝ 7 30 l ěhkQUdZ`7tI i rÄ<Ů ó' ; !
&J Nóý*O <à: Jx <OD; ' N Ž88E; i ~%<®9E02; 4%J(8F
žJ(8<i*) N *6EHt 0t 8 ž 6t J/ áó' =i Ÿ; t 0t ½âN036t 0#i
ú¥<Ů\$Sg^POfWí éÑ-<Ä ; GI | 7\$: t ÷ò7tJ/

rÄE pŮ -°° eŮ ° <öÉNó" *i Ůj ě <°è#! " <Ů úª: 98 Øj " } *i
" : äè<Ů <' úN±J(8=i : (87tJ8 ž 6t J/

pŮ -°

園児を対象に行う銅版画制作の実践と考察について

井戸川 敦

発表者は東京都荒川区立幼稚園の研究指定園において、東京藝術大学からの教員と学生（共に大学院芸術学専攻美術教育研究室所属）と共に、幼稚園教諭数名の協力のもと園児 11 名（+幼稚園教諭 2 名）を対象とした銅版画（腐蝕銅版画）の制作による実践的研究を行なった。銅版画を園児の実践的研究として選択した理由は実技担当講師である発表者の専門が銅版画であること、また園児を対象とした銅版画制作の前例があまり見られないことが挙げられる。そのため本実践的研究を報告させていただくことにより、園児を対象とした銅版画制作の詳細な共有としたい。

本実践的研究は 3 日間にわたり実施された。当該年度の卒園生を対象に銅版画制作を行ない、本実践的研究で制作された銅版画（200×150mm）と、期間を通して製版された銅板とを同一の額に額装し、卒園式にて贈呈させていただき計画とした。各回のテーマは、第一回「下絵の制作」、第二回「版の制作」、第三回「摺りの作業」とし、第一回「下絵の制作」は大学側で下描き用紙や筆記用具を用意し、当日は「幼稚園での思い出」をテーマに描画した。第二回「版の制作」では第一回で制作された下絵を、前もってグラウンド引きされた銅板にニードルなどで描き写す作業を行なった。第三回「摺りの作業」では、やはり前もって腐蝕しグラウンドを落としておいた銅板を、大学から持参したプレス機を使用し、園児自身でインクを詰めインクを拭き取り、プレス機の重いハンドルを回して銅版画を摺り上げた。そして第三回で園児によって摺られた銅版画と製版された銅板とを同一の額に額装し卒園式で贈呈した。

また各回の考察としては、第一回「下絵の制作」は今回の研究指定園では幼稚園教諭の協力もあり問題なく制作された。第二回「版の制作」は、計画の段階ではトレーシングペーパーとカーボン紙を使用してグラウンド引きされた銅板に下絵を転写する予定であったが、園児の下絵はとても元気で勢いのある、しっかりとした下絵が多かったため、転写ではなく下絵を脇に置いて見比べながらニードルなどで描き写す作業とし良い結果を生んだ。第三回「摺りの作業」では園児の作業時間を 45 分と設定していたのだが、摺りの体験がとても新鮮であったのか、あと 15 分程度長くても園児の集中力は途切れなかったと思う。園児によって摺られた作品はインクが付いてしまったり、またインクがよく拭き取れていなかったりと手垢に塗れたものばかりではあったが、どれもとても微笑ましく、またその汚れすらもとても魅力的に映る大変豊かな作品ばかりであった。その後の額装は、計画段階では発表者が園児の銅版画を本摺りし額装に使用する予定であったが、参加した大学側スタッフとの話し合いにより園児が自身で摺った銅版画を使用することとした。先述の通り、園児の銅版画は多少汚れの目立つ状態ではあったが、園児や保護者（Zoom で参加）の思い出に残る企画として、また園児の「幼稚園での思い出」としてこれはとても良い選択であり、美術（図工）を教育する側としても、この体験から得られたものはとても多かった。発表者自身は銅版画が専門であり、当然発表者が摺った銅版画の方が汚れもなく綺麗なものにはなるのだが、園児の摺った銅版画の方が今回の企画においては情報量が多く、とても豊かな作品となっていた。発表者が 1 人で行なっていた場合にはこの選択は無かったと感じている。

口頭発表では本実践的研究の具体的な準備や実践とそこからの考察を報告し、大会参加者が園児を対象に銅版画制作を行う際の一助となるものとした。

（東京福祉大学）

自律的な学びの可視化に向けた取り組み ー学生インタビューの可能性ー

鳥原正敏

社会の変化が激しく未来を予測することが困難な時代において、社会人は持続可能でより豊かに生きるために、自律的に学び続けなければならない。また、これから社会人となる大学生は自律的に学び続けられるよう理解を深めておく必要がある。と同時に、大学には学習の質の向上と可視化、改善に向けた組織的な取り組みが求められている。

現代社会において、個人の寿命が長くなり社会変動の周期が短くなったことで、現代人は一生のうちにくつもの社会変動を経験するという。更に、コロナ禍がこれらの変化をより複雑にした。このような時代において、既存の職業をイメージしながら公式化された知識を受け取るだけでは、持続可能でより豊かに生きることができない。興味関心を基に、知識と知識を組み合わせ新たな知識をつくりだし創造的に学び続けること、即ち自律的に学び続けることが求められるであろう。

また、小学校教師に求められる能力も変化している。即ち、変化する社会と学校に対応するために教師自身も自律的に学び続けることが求められている。と同時に、こういったことをどのように子どもたちに伝えればよいのかが問われている。

筆者は都留文科大学教養学部学校教育学科に所属、小学校教員養成に携わっている。また、学生が興味関心を入りに主体的かつ創造的に学ぶことで、自律的に学び続けることの重要性を理解できると考えてきた。そのために、学びに誘う”場”として「美術研究棟」を整備し「DIGITAL 図工室」をはじめ絵画や彫塑、陶芸、木工など“手”と“頭”を使って考え、作業ができる空間づくりと、授業時間以外も学生と関わることができる教員配置に注力してきた。

その一方、自律的に学び続けることへの理解は学習者の内面で起る変化であるため、画一的なアンケートの質問で見極め、把握することはできない。また、本人が自覚していないこともある。

では、学生の自律的に学ぶことへの理解をどのように見極め、内部質保証で言う学習過程の改善を図ればよいのであろうか。

上述の課題意識から筆者は、これらの可視化を目指して「学生インタビュー」を試みた。その結果、学生自身が自律的に学ぶことの重要性に気づき、様々な知識を組み合わせ新たな能力を獲得し、成長する様子が確認できた。また、これらを他の学生や教員と共有できるようになった。更に、学生が学習成果を子どもたちにも伝えたいと考えていることが確認できた。

一方、「学生インタビュー」には時間と手間がかかるため、学部や学科、大学規模で行うことは難しい。また、プライバシー保護の観点から全てを公開することができない。こういった課題により、現段階において内部質保証に対応する活動には至っていない。しかし、学びとは身体性を伴う創造的な行為であることから、他に可視化する方法はないと考えている。上述の課題も、テクノロジーの進化により改善されるのではないかと、といった微かな期待もある。

コロナ禍が続き未来を予測することが極めて困難な時代において、自律的に学び続けることは更に重要になるであろう。一方、こういった力を獲得する様子を可視化し評価する方法についても検討しておくべきではないか。本発表ではこれらの課題を念頭に「学生インタビュー」に関する報告を行いたい。本活動は、現在は小規模で実験的な取り組みのため内部質保証には及ばないものの、近い将来においてAIなどの技術革新により組織的な取り組みに繋がり、豊かな学びの在り方を考える足場となることを期待したい。

(都留文科大学)

あおもり JOMON GYOMO プロジェクト実践報告

-自然との共生を縄文文化から学び、人・地域・時代をつなぐ活動-

渡邊五大（発表者）*上原利丸*橋本圭也*武内優記* 白田祥章**早川麗子*

本発表は青森県環境生活部県民生活文化課から東京藝術大学美術教育研究室に委託されている受託事業であり、3カ年計画の中で進行中の本プロジェクトについて、考察を交えて報告するものである。

「青森の子供達が地域の芸術文化に持続的に触れる機会が少ない」そして「郷土愛を育むような機会の創出を」という課題に応えるべく、青森から発信する主体的で対話的な深い学びをめざして、美術の視点を用いて文化芸術体験・学習活動を構想し、社会教育や学校現場での活用・展開に取り組んでいる。今年世界遺産登録された北海道・北東北縄文遺跡群を活用し、日本文化の源であり、生きる知恵や創造的な造形の宝庫である縄文文化について理解を深めることで、予測困難な時代を生きていくために必要な豊かな創造力や、他者と協働して課題を解決していく力を身につけることができると考えた。数ある題材の中から植物繊維による造形を選んだのは、縄文の「縄」に示されているように植物繊維を使った多くの生活文化が縄文文化の基本にあると考えたからであり、現存しているものが少ないからこそ、美術の視点をもって想像力を豊かに膨らませて表現することができると思ったからである。共同研究者として本学染織研究室に、植物繊維の縫り・編み技法について助言と教材研究等をお願いし、苧麻という麻の繊維から糸を縫り、網を編み、一人一人の網を繋げて巨大な漁網を協働制作することを考案した。しかし感染症拡大により対面での実施を諦め、藝大教員と児童・生徒は対面しない遠隔方式でやらざるを得なくなった。遠隔で実施する手立ての検討を重ね、教材動画の制作と配信、複数回線で役割分担するシステムの構築、中継用端末機器の導入等、様々な案を具体化した。生映像と事前収録の教材を織り交ぜながら、そして参加者との対話も大切にしながらの新様式出前教室を現在(R3年9月)まで県内小・中・高校や文化施設で20ヶ所以上実施した。また、縄文遺跡は日本全国に広く分布していることを踏まえ、この出前授業については、令和3年度から県外の学校や本学学生にも広く協働を募り、現在まで10ヶ所以上で実施してきている。

コロナ禍によって、結果的に従来型ワークショップに技術革新が起こったと考えるが、その一方でこの活動が実施できているのは現地の担当者の方々の多大な尽力のおかげであるとも強く感じた。リモート=肉体的な労働を伴わないような洗練された印象があるが、現地でのマンパワーの支えなくしては到底実現し得ない。人工知能の進歩が著しいが、まだまだ芸術や教育と言った分野では人間に強みがあり、取って代わるわけにはいかないと考える。この遠隔授業に真摯に取り組んできたからこそ思うのは、人と人との対話や素材との触れ合いといった本物の生の体験がますます魅力的に、かつ重要になってくるということである。

今後の課題としては、ネット環境や端末機器といった情報通信技術のさらなる充実である。技術的トラブルの不安は最後まで払拭できなかった。

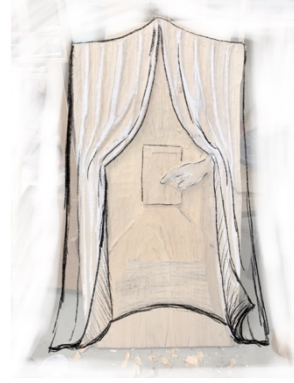
感染症の状況を見極めつつ、来年度(R4秋)は各自の網を繋ぎ合わせた巨大漁網で地引き網をして往時の漁労に思いを馳せたい。その後本プロジェクトの成果発表展を青森県立美術館で行う予定(R4年冬)。展示中には草花や樹木の種子を漉き込んだシードペーパーの制作ワークショップを開催し、展示後には漁網にそれらを取り付けて県内各所に植栽していく(R4年度末)。持続可能型プロジェクトとして縄文→現在→未来へと、青森の人の営みの素晴らしさを次世代に繋げていきたい。

令和2~3年度在籍の美術教育研究室教員(赤石隆明 上田華奈 久保田木都 笹野井もも 中畠雄里 新井田宇謙 西山大基 初山逸平 宮永美知代 横山麻衣)に研究協力頂いたことを付記する。

(*東京藝術大学) (**美術家)



『悪夢』(樟 1000×700×100mm 2021)



作品を撮影した写真にデッサンを合成したもの

空間を考えるーイメージと身体のはざままでー

彫刻と並行して、ドローイングの制作を行っている。そのドローイングをもとに彫刻に展開することも多い。しかしドローイングから彫刻への変換は決してスムーズなものではなく、量感や素材のもつ特徴に左右され、実際の空間の中でどのように存在すべきか考えるために、自ずとイメージは歪み変化していく。私はその歪みに面白さを感じている。

ドローイング然り、絵画における空間を考える。画面の中は視点を基準に手前から奥に空間が広がっており、見る者は身体を伴わずに画面の奥へ奥へと入っていくことができるという遠近の空間性がある。またデッサンの感覚も関連づけることができるだろう。石膏デッサンなどの基礎的な形態把握のためのデッサンでは、しばしば空間意識や立体感、量感を重視するが、彫刻的意識はあれど、視線は一方向で、あくまである一面からの立体を捉える行為である。限られた視野から見た形態の立体感を表し切るためには、見えない裏側を捉えようとしたり、遠い部分は奥へ押し込めたり、近い部分は手前へ引き出したり、形態の持つ奥行きを紙の中で行わなければならない。一方で実際目の前に彫刻がある時は、視線はぐると螺旋状に誘導され、そのまま裏側を、また正面まで360°、身体を伴って鑑賞することができる。これが彫刻の空間性である。彫刻は私たちの身体と同じ地平に立っている。私はこの大きな事実、遠近の空間性を織り混ぜることで、彫刻と対峙する身体を捉えたいと考えており、2018年頃から木彫でのレリーフ表現を模索している。

レリーフ (relief) は浮き彫りと訳されるように、基準面に対して形が手前に浮き出すように造形する表現であるが、ここで私は「面出し」という木彫の基本的な工程に繋がりを見出した。円柱状の丸太を面出しし四角柱に整え、その四面にデッサンをし、木から彫り出される形の表層に向かって奥行きを作っていく、非常に図面的な仕事である。さらには先に述べた絵画の空間性では、視点となる画面よりも手前には像は飛び出さないはずだと考えられることから、基準面から奥に形を彫り込んでいく方法で造形することが必然的だと思い、手前から奥にレイヤーを重ねるように彫っている。

本作品においても樟の丸太を厚みのある板に製材し面を出して像を彫り込む技法を用いている。劇場をモチーフに、緞帳、舞台、手、窓を奥行きの中に彫り、遠近の空間の表現を試み、同時に実体として身体と地続きの空間に存在させるために、シルエットや量の操作を試みる。また、実空間においては造形と陰影の関わりが密接であり、造形によってできる陰影の明暗を空間性に発展させていくことが今後の課題であると感じる。

笹野井もも (東京藝術大学)



『Origin』 (脱活乾漆造：麻布・木屑・砥の粉・顔料 160×160×18 cm 2021年)

「Origin」

彫刻、それは空間に実在するという。触れることで安らぎを感じることができる。実在感が彫刻の面白さである。彫刻は映像のように、見る角度や光、時間や心情によって刻々と変化した様子を見せる。鑑賞する人の感性によって映像の流れの瞬間が印象づけられるのである。

今回の作品は、生命の入り口を作りたいと思った。人は意識して生まれ死ぬことはできない。生と死の間に何があるのか想像してみた。見たこともないフォルム、強さ、恐ろしさ、美しさを目指して制作した。穴のある正円の形をもとに同じ形の粘土をできるだけ意識せず投げ付けて重ねていった。意図したフォルムを作るのではなく、イメージと偶然から生まれる形の中で再構成をした。それは制作の最後までどのようなフォルムになるか分からない方法である。これは子どもが造形を楽しむ行為に似ている。純粹にものを作る楽しさや興奮である。土を触り、練り、付ける(投げる)土を身体で感じ偶然できた形に想像力を働かせる。

脱活乾漆とは漆と麻布が主な材料である。漆と小麦粉と水と少量の木屑を混ぜる。それを麻布につけ形作った粘土にかぶせ竹籠で抑えて形を作る。その上からさらに木屑を使って形を整える。中の粘土を抜き出す。さらに上から錆漆を塗り、表面を仕上げていく。その上から黒漆を何度も重ね、一部に赤漆を塗った。表面は様々な工程が見えるようすべて同じ仕上げにならないようにする。通常、麻布は見えないがはみ出した麻布と墨汁で染めた麻布を結び合わせ、横糸を抜き取り広げることにした。

これからも私の内と外の世界にある自然の強さや美しさを漆という素材を通して表現していきたいと思う。

上山 明子 (小田原短期大学)